老舎小説全集
第3巻

馬さん父子（マーおやこ）
小坡（シャオポー）の誕生日

竹中伸
斎藤喜代子
訳

学習研究社

老舎小説全集　3
馬さん父子・小坡の誕生日

1982年3月20日　初版発行

定価　2400円

訳　　者　竹中　伸
　　斎藤喜代子
発行人　鈴木泰二
編集人　大山治義
印刷所　壮光舎印刷株式会社
製本所　株式会社国宝社
発行所　株式会社　学習研究社
（〒145）東京都大田区上池台4—40—5
振替・東京8—142930番

☆この本の内容・製本などに関するお問い合わせは，下記あてお願いします。
文書は，東京都大田区上池台4丁目40番5号（〒145）
学研お客さま相談センター「老舎小説全集」係
電話は，東京（03）720—1111（大代表）

本書内容の無断複写を禁じます。

© GAKKEN　　Printed in Japan

0397—165　253—1002

目次

馬さん父子――――――3
小坡の誕生日――――――291
解説（日下恒夫）（斎藤喜代子）――――――319

装丁　内藤　正人

写真撮影　中村　梧郎

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

馬（マー）さん父子（おやこ）

――二　馬――

竹中　伸訳

第一段

1

馬威は下俯いて、マーブルアーチの方へ向かって歩いていた。

四、五歩歩いて、ハッとして思わず立ち止まった。そして、右や左をキョロキョロと見まわした。いったい何を見ようとしているのだろう？　いや、何も見ようとしているのではなく、そもそも見たくても何も見えやしないのだ。

彼の頭はあの事でいっぱいであって、ちょうどドロドロに溶けた膠が固まって、頭の中いっぱいに硬張りついたような状態であり、外界の物が入って来る一点の隙間さえなくなっているだけでなく、全身の筋肉までカチカチになってしまって、頭の指揮命令に従わなくなっているのだ。眼から出る視線は、パッと出るとすぐにパッと戻って来て、何一つ外界のものを持ってこない。彼の頭の中では一切のこの世の中のことが消えてなくなってしまっているのだ。こうなったら、いっそ彼自身もこの世の中から消滅してしまった方がよかったかもしれない。

突然、路上に立ち止まって動かなかった彼は、二、三分間ボンヤリと突っ立っていたが、やっと眼の前がだんだんハッキリ見えるようになって来た。

「アッ！　そうだ、今日は日曜日だ！」

彼は低い声で唸るように叫んだ。

日曜日の午後は、このマーブルアーチ一帯はいつも大変な人出で賑い、芝生の上も砂利道も人だかりで埋まってしまう。

労働者風の男が、毛むくじゃらの大きな手で赤旗を振りながら、首を前方に突き出すようにして、塩辛声を張り上げ、

「ブルジョア階級を打倒しよう！」

と叫んでいる。世の中の悪いことは一切合財皆ブルジョア階級のせいであって、昨夜よく眠れなかったのもブルジョア階級のせいだということになるらしい。

この赤旗のすぐ後から保守党員らしい男が、長い首をいっそう長く伸ばして（七、八十センチほどもある高いカラーを着けているので、いやでも首を長く伸ばさざるを得ない。）、華奢な白い手で国旗を振りながら、

「労働党を打倒しよう！」

「愛国心を失った亡者どもを打倒せよ！」と叫んでいる。この連中にいわせると、およそ天下の罪悪はことごとく労働党のせいであって、今朝がた雨が降ったのも、朝食のうで卵が腐っていたのも皆労働党のせいだということになるらしい。

すぐその後に続いて青い旗を持った救世軍が八角形の太鼓をたたき、フルートを吹き、わけの分からぬ讃美歌を歌いながらやって来た。彼らの上帝を讃美する声が高くなればなるほど、赤旗の下の労働者の叫び声に力が入って来る。時どき聖霊に充たされて讃美歌の声が天地を震わすほど高くなると、赤旗の連中は字典にもないような言葉を連発させて、めったやたらと罵り喚く。

救世軍が通り過ぎると、今度は天主教の宣教師がやって来て、路傍説教を始める。種々さまざまな団体や宣伝隊が次から次へとやって来て、インドの独立を支援しようとか、中国は早く滅ぼしてしまうべきだとか、自由党を復活させようとか、勝手な演説をする。中には大勢で一人の赤髭の老人を囲んで、無言のまま互いに顔を見合わせてニコニコ笑っているのもいる。

赤旗の下に立っている連中は、ほとんど皆、口に小さなパイプをくわえ、両手をズボンのポケットに突っ込んで、演壇の上で何か一言叫ぶごとに一斉に大きく肯く。

国旗の下に集まって演説を聴いている連中の半数ほどは黒い山高帽をかぶっており、演説の一句ごとに「そうだ！」「そのとおりだ！」と合いの手を入れる。時には二人の男が同時に大声を出して「そうだ！」と叫び、お互いに顔を見合わせ、意気投合の意思表示をするかのようにニッコリと微笑を浮かべる。あちらこちらに自然発生的にできた小さなグループでは、こちらの大きなグループのようにスンナリと満場一致とはいかず、互いに甲論乙駁し、中には山羊が角突き合っているような格好で、低い声でブツブツ論じ合っているのもある。

この外になおもう一つのグループがあり、帽子をわざと阿弥陀にかぶり、やや眼付きの鋭い若者の一群であって、彼らは小グループを取り囲んで大声で冗談をいい合って笑っている。この連中は専ら冗談をいって人を笑わせることによって、自分たちの存在を認めさせようとしているかのようである。

これらの人混みを遠巻きにして、あちらこちらに三三五五巡査が立っている。ロンドンの巡査は皆同じような背丈であり、大きな手、大きな脚、まるで一人の母親から生まれた兄弟ではないかと思われるほどである。

中でもひときわ目立って見え、思わず拍手喝采したくなるのは真紅な軍服を着た近衛兵である。彼らは定規を立てたように腰をピンとまっすぐに伸ばし、ズボンの縫い目の中には鉄の棒でも縫い込んであるかのようにまっすぐに立っている。どの兵士も垢抜けした上品な感じで、顔には常に微笑を絶やさず、真っ白な門歯をかすかにのぞかせている。彼らは何も聞こえないかのように、超然と人群れの外に立っていて、絶えず四方に眼を配っている。そして、五分間ほど経つと、急に気が変わったように、そこに現れた若い娘と腕を組んでサッサと立ち去り、向うの芝生の上へ行って女と並んで坐って話し始める。

芝生の上には大勢の男女がいて、顔を寄せ合って話をしているのもあり、中には寝ころんで、腕を女の首にからませているのもある。かと思うと、ポツンと独りポツチで坐って夕刊をひろげている者もある。だが、よく見ると、夕刊は読まないで、専ら横の女の白い脚を眺めている。

一群れのまるまる肥った犬が、ワンワンと歓喜の声をあげて跳びはね、不思議なものを見つけたように子供に向かって吠えている。子供たちのある者は全身真っ白な毛糸のセーターを着ており、またある者は赤い毛糸の帽子をかぶり、赤いセーターに赤いズボンという、頭から足の先まで赤ずくめの子もあり、どの子供もまだヨチヨチ歩きで、今にも転びそうな足どりで芝生の上を走り廻る。それを追いかけるように、白いつば広の帽子をかぶった中年の女性がブツブツ小言をいいながら小さな仙人たちの後について走る。

馬威はかなり長い間ボンヤリと立っていた。別に演説を聞く気もなく、かといって、どこに行こうというあてもない。

彼は年のころ二十二、三歳で、身長は低い方ではないが、ひどく痩せている。黄色味を帯びた色白の顔は肉付きはよくないが、さほど弱よわしい感じではない。二条の長い眉はかすかに吊り上がって見え、眼尻も幾らか吊り上がっている。眼球は真っ黒で非常に明るい眼付きをしていて、黒眼と白眼がほどよく調和して生き生きしている。もしいつも笑っているような一対のこの黒い眼がなかったら、彼の顔はいささか怖い感じになるだろう。鼻は大して高い方ではないが、顔全体が痩せているので、高からず低からず、程よく釣り合って見える。上唇がかすかにめくれ上がっているが、いつもニコニコ笑っているような眼とうまく釣り合って、人なつこい感じを醸し

出している。

彼はグレーの服を着、黒羅紗のオーバーを着ている。衣服はなかなか凝ったものであるが、余り手入れをしないらしく、なんとなく疲れて見え、ちょうど彼の顔と同様に余りパッとしない。

彼はポケットからハンカチを取り出して顔を拭いた。拭き終わっても依然としてボンヤリとそこに立っていた。

もう太陽は西に傾き、一条一条の夕焼雲が、緑の絨氈のような芝生を黒味を帯びた紫色に変色させ、労働者の持っている赤旗もどす黒く見える。演説を聴いている人影もだんだん疎になって来た。

馬威は手をオーバーのポケットに突っ込み、五、六歩前進して芝生の周囲の鉄柵に靠れた。

西空の赤い夕焼雲は太陽の残光を浴びて、先ほどまで淡い葡萄色をしていたのが、しだいに山鳩の首のようなブルーを帯びた灰色に変わり、見る見るうちに灰色が濃くなっていき、地上の淡い霧といっしょになって、地上の一切を暗黒の中に呑み込んで行く。労働者の赤旗もほとんど黒く見え、遠くの木立もソッとこの黒い影に抱かれて夜の世界へと入っていく。

人の数もだんだん減って、もうほとんど人影もなくなった。気がついてみると、あたり一帯のガス灯に灯が点り、マーブルアーチの周囲を赤や緑色のバスが、ガス灯の光をキラキラと反射させながら大きな円形を描いて走って行く。夕霧の中に立って遠くから眺めていると、一条の長い虹が揺れ動いているように見える。

いつの間にか芝生の上には人の姿がなくなり、鉄柵の周囲に幾つかの黒い人影が見えるだけになっていた。

2

李子栄はもう蒲団の中にもぐり込んでいた。足を左の方へ投げ出し、手は右側へ伸ばして、まだウトウトと半眠りの状態にあったとき、漠然となんだか戸口の呼鈴が鳴ったような気がした。眼を開こうとしたが、頭は重く、自然と枕の下にずり落ちて行った。が、心の中では今しがた何か物音が聞こえたことをボンヤリと覚えていた。

チリチリチリ……また呼鈴が鳴った。

彼はやっと半眼を開き、枕からずり落ちた頭をもとの位置に戻した。

チリチリチリ……。

「この真夜中に、だれだろう？　幽霊ではないだろう

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

か？」

彼は片手で掛蒲団をまくり上げ、もう一方の手で窓のカーテンを開けて外を見た。

狭い路地にガス灯はあるのだが、霧が非常に濃くて何も見えない。

チリチリチリ……。

今度は前よりいっそう強くて長かった。

李子栄は起き上がった。暗がりの中で靴を履いたが、冷たい靴底に熱い足の裏が触れると、思わずブルブルと震え、全身にとりはだができた。四月の末ではあるが、夜はまだかなり冷える。彼は手さぐりでスイッチを捻り、肩からオーバーをひっかけて、瓜先立ちで足音をしのばせて階下へ下りて行った。階下のお婆さんはもう眠っているので、うっかりして眼を醒ませると怒られる恐れがある。

彼は音を立てないようにソッとドアを開け、「だれ？」と極めて低い声でいった。その声の低さは、まるで外の濃霧を驚かすことを恐れているかのようだった。

「僕だよ。」

「馬君か？　どうしてそんなにジャンジャン呼鈴を鳴らすんだ……」

馬威は黙って中へ入ると、すぐに二階へ上がって行った。

李子栄は用心してソッとドアを閉め、黙って馬威の後について二階へ上がって行った。部屋のドアの前まで来ると、彼は立ち止まり、耳をそばだてて階下の様子をうかがったが、なんの物音も聞こえて来なかった。彼はホッとして、

（ああ、好かった。婆さんは眼を醒まさなかったらしい。うっかり眼を醒ませでもしたら、明日の朝食のパンは半分に減らされた上に、さんざん文句をいわれるところだった……）と心の中で思った。

二人は部屋に入り、馬威はオーバーを脱いで椅子の背に掛けたが、黙って何もいわなかった。

「どうしたんだ？　馬君！　また親父さんと口喧嘩でもしたんだろう？」李子栄が訊ねた。

馬威は黙って首を横に振った。彼の顔は裸電灯の下でひどく青ざめていた。眉は今にも水玉でも絞り出すのではないかと思われるほどにしかめていた。眼の周囲にはかすかにクマができ、鼻の頭には小さな汗の粒が浮かんでいた。

「いったい、どうしたんだね？」李子栄はまた訊ねた。

暫くたって、馬威はフーッと嘆息を吐き、乾いた唇をなめながら、

「僕はとても疲れているんだ。李君、僕ここで一晩泊まって好いかい？」

「ここにはベッドが一つしかないよ。」

李子栄は自分のベッドを指さして笑いながらいった。

「僕はこの長椅子で寝るよ。」馬威は俯いたままいった。「とにかく一晩だけの辛抱だ。明日になったら、なんとかなるんだ……」

「明日は、いったいどうするんだね？」

馬威はまた黙って首を振った。

李子栄は馬威の性癖をよく知っていた。この男がいったんいわんとなったら幾ら詢ねても無駄である。

「好いよ。」李子栄は爪で頭の髪をかきながらなおも笑っていった。「君はベッドで寝たまえ。僕がこの長椅子の御厄介になることにするよ。」といいながら毛布を出して来て長椅子の上に敷いた。

「だがね、一つだけ条件があるんだ。夜が明けたら君はすぐに出て行ってくれないと困るんだ。階下の婆さんに見つかると、とても面倒なんだから。じゃ、お寝み！」

「駄目だよ、李君！　君は君のベッドに寝たまえ。僕はほんの暫くこの椅子の上で横になってウトウトとするだけで好いんだから。」

馬威の顔にやっとかすかな笑いが浮かんだ。「僕は夜が明けたらすぐに出て行くよ。きっと出て行くよ！」

「どこへ行くんだ？」李子栄は馬威の笑顔を見て、また話をもとへ戻そうと思った。「ねえ、話してくれよ！　でないと、僕は心配になって眠れそうにないよ。また親父さんと喧嘩をしたんだね。そうだろう？」

「その話は止めようや！」馬威は哈欠を一つして、「僕は君を訪ねる積りじゃなかったんだ。しかし、今夜生憎とひょんなことになってね、やむを得ず君のところに邪魔して迷惑をかけることになったんだ。」

「どこへ行くんだ？　結局……」

李子栄は、馬威が決してベッドに上がって眠ろうとしないのを見て、話をしながら、自分のオーバーや毛布をソッと馬威に掛けてやり、それから電気のスイッチを切って、また自分のベッドに上がった。

「ドイツか、フランスか……まだ決めていないんだ。」馬威がいった。

「親父さんの商用で行くわけか？」

「親父は僕に出て行けっていうんだ！」

「えっ!?」李子栄は驚きの声をあげただけで、何も言葉が出なかった。

二人とも黙ってしまった。

街はシーンと静まりかえって、遠くの方の汽車や汽船の気笛の音が時どきかすかに聞こえるだけで、ほかにはなんの物音も聞こえない。

「寒くはないかね?」李子栄は訊ねた。

「大丈夫だ。寒くはないよ!」

……

李子栄はベッドの上で、眠る前に心の中で一つの計画を立てた――(明日は早く起きて、馬威を一人で帰さないことにしよう。起きたらすぐに水で顔を洗って、階下の婆さん宛に、急用ができたので朝食は食べないで出て行く……という置手紙を書こう。それから彼といっしょに出かけて、彼を家まで送って行ってやろう。――そうだ、やはり店へ行った方が好いだろう。父子が顔を合わせて、まさか店でまた親子喧嘩を始めるわけにはいかないだろうから――よくあることだ。親子で口喧嘩をするなんてことは……馬君は若くて、余りにも一本気過ぎるんだ……)

彼は夢の中でまで、なお、あれこれと考えていた。

路地の中で、ゴトゴトゴト……と牛乳配達の車の音が聞こえてきた。向うの大通りを走る自動車やトラックの音もしだいに烈しくなってくる。李子栄はハッとして眼を醒ましたが、太陽はもうカーテンの隙間から金色の光を部屋の中に射込んでいた。

「馬君!」

毛布もオーバーも、長椅子の背に掛けてあった。が、馬威の姿はなかった。

彼はバネ仕掛けの人形のように跳び起きて、カーテンを引き開け、オーバーを肩にかけたまま呆然と窓際に立っていた。

窓から外を眺めると、真正面にテームズ河が見える。河岸にはまだ道を歩く人影は見えないが、水上を走る小船は、もう活動を始めていた。岸辺の若木はやっと浅緑の芽を出したところだが、梢には淡い霧がかかっていて、太陽の光は霧の隙間を透して若葉を照らし、ピカピカと輝いて、今水から撈い上げた緑の水玉のように見える。

河に浮かんでいる大きな船は、ほとんど皆帆を張っていない。ただ数隻のヨットだけが白い帆を張って、大きな船の間をスイスイと通り抜け、軽く揺れ動いて、ちょうど大きな白い蝶が花に戯れているように見える。

朝の潮がドンドン満ち上がって来て、コロコロと水面をころがっているような波頭が朝の陽光を反射して金色の鱗のように見え、高く盛り上がった波が抱き合って崩れ落ち、そのたびごとに粉ごなになった金色の星を撒き散らす。金の星屑が飛び散った後には、またすぐ大きな白い花のような波が盛り上がって押し寄せ、今咲き出したみずみずしい蒲公英の白い花のように見える。

一番遠くの方に碇泊していた小型の帆船がゆっくりと動き出した。河波が転がるようにして船の後を追いかけて行く。まるで金色の龍が小さな白い蝶を追いかけて走っているようだ。やがて小型の帆船はグルッと横に向きを変えて見えなくなってしまった。

李子栄は、ボンヤリと小さい帆船を眺めていたが、帆船の姿が見えなくなると、やっと正気に返ったように、街路に面した別の窓の方へ歩いて行ってブラインドを開けた。それから机の上の物を整頓しようと思って自分の机の前に戻った。

机の上に何か一つピカッと光る小さな物があり、この小さな物の下に置手紙が置いてあった。彼はこれらの物を見た瞬間、なんだか急に心の中にヒヤリと冷たいものを感じた。二つの品物を手に取ると、ゆっくりと長椅子の方へ歩いて行き、そこに腰かけて、注意深く置手紙を読み始めた。手紙は鉛筆で走り書きをした短い文面であったが、筆跡はあっちに曲がったり、こっちに歪んだりしていて、どうやら暗がりの中で書いたもののようであった。

「子栄兄　どうもありがとう！　この小さなダイヤの指輪をミス・ウインターに渡してください。さようなら、威」

第二段

1

この章の話は、馬威が李子栄のところから出て行ったあの日から一年前に逆戻りすることになる。

伊牧師はかつて中国で二十余年の間、伝道に従事していた老牧師である。およそ中国のことなら、伏羲が八卦を作ったことから、袁世凱が皇帝になったこと（これは彼が最も得意になって話す事件である。）に至るまで、な

んでも皆知っている。中国語が余り上手でない点を除けば、彼は全く歩き回ることのできる『中国百科事典』ともいうべき人物であって、何しろ彼は中国人が大好きなのである。

夜半に眼が醒めて眠れないときなどには、いつも上帝（天の神様）に対して、どうぞ早く中国が英国の属国になりますようにと熱涙を流して祈る。中国人は英国によって統治されなければ、あの黄顔黒髪の人間どもはとても天国に入ることはできない！

伊牧師は、今オックスフォード大街を東へ向かって歩いている。彼はもう六十歳を過ぎているが、歩くことが実に速い。まるで飛んでいるようだ。

朝、太陽が出てから真夜中まで、オックスフォード大街は、いつも女性でいっぱいである。この大通りの店は、幾軒かの煙草屋以外はほとんど皆女性用品を売る店であって、彼女たちがこの大通りにやって来ると、どんな急用があるときでも、一分間に二歩歩くのがせいぜいである。店に並んでいるのは色とりどりの婦人帽、ハイヒールの靴、手袋、ハンドバッグ……といった類であって、どの品も皆特別の吸引力があり、彼女たちの眼も体も魂もことごとく吸いつけてしまう。伊牧師の宗教家としての尊厳は、この街へ来ると九十九％減少してしまう。

大股で一歩前へ進むと、あの高くて邪魔になる鼻は、どうしてもお婆さんの陽傘にぶっつかる。しまったと一歩後退すると、大きな革靴の底（彼は決してゴム底の靴は履かない。）は十中八、九若い娘さんの靴の先を踏みつけている。手を伸ばしてハンカチを取り出そうとすると、肘は必ず隣の婦人の提げている買物籠の中に突っ込むことになる……いつも彼がこの街を通るたびに、少なくとも家に帰ったら直ちに下衣一枚と、ハンカチ二枚を取り替えねばならなくなる。「どうもすみません。」とか「うっかりしていまして。」という言葉に至っては、数え上げると少なくとも八十回から百回ぐらいは発している。

人混みに揉まれながら、やっとの思いでオックスフォード大街の中ほどまで辿り着いたとき、彼は深ぶかと嘆息をつき、「神様、ここまで辿りつくことができましたことを感謝致します……」と祈りを捧げ、それからまた足に一段と力を入れて、東の方へまっすぐに歩いて行った。玉のような汗が雪に変じて真っ白い鬢を伝って滴り落ちる。

伊牧師は六十歳を過ぎているが、まだ腰は全然曲がっていない。髪はさすがに残り少なくなっているけれども、

純白で美しい。二つの大きな顎はいつもピカピカに剃っており、もし顔にシワがなかったなら、美しい青茶色の磁器のように見える。二つの大きな眼の中には、一対の小さな黄色い眼球がゆったりと安置されている。眼の上には二つの小さく盛り上がった肉塊があり、たぶん二、三十年前まではこの小肉塊の上に眉毛が生えていたのだろう。眼の下には小さな眼鏡がぶら下がっている。それは鼻が余り高過ぎるために眼鏡と眼との距離が二寸ほど空いているからである。だから眼鏡の框の上から物を見るより、眼鏡と眼との間から見る方が遙かに便利である。唇は甚だ薄く、おまけに口の両わきが少し下がっている。説教をするときには、二つの小さな黄色い眼珠が眼鏡の框の上に定着し、薄い唇の両端が垂れ下がっているので、これを一目見ただけで、人びとを思わず身震いさせる。しかし、平常個人的に会って話をするときは、至って優しく、人なつこい。宣教師というものは、どうやら二つの顔を持っていないと務まらないものらしい。

博物館街まで行くと、彼は左の方へ曲がり、タオリンドン広場を通り抜けて、ゴルドン横丁へと入って行った。この一帯の横丁にはたくさんの中国人学生が住んでいる。

ロンドンに住まっている中国人は、大体において二種類に分けることができる。労働者と学生とである。

労働者の大部分は東ロンドンに住まっており、最も中国人の面子を壊しているのはこの中国人街である。銭がなくて東洋まで出かけて行くことのできないドイツ人、フランス人、アメリカ人らはロンドンに来ると、ぜひこの中国人街を一目見ようとする。それは小説や日記や新聞記事の材料を探すためである。中国人街は何もそんな猟奇的な場所でもなければ、そこに住んでいる労働者だって何も特筆大書に値するようなことをしているわけでもないのだが、ただそこに中国人が住んでいるという、それだけの理由でこの中国人街を見物に来るのである。それは結局中国は弱国であるから、白人どもは思うままに彼らを虐げ、異域にあってその日の食を得るために汗水を流している〈中国人〉の上に一切の悪事を押しつけようとしているのだ。

中国人街に、もし二十人の中国人が住んでいたとすれば、彼らはきっと中国人五千人と書くだろう。そして、この五千個の黄色い顔の悪魔どもは、阿片を吸い、ピストルの密輸をし、人殺しをして屍体を床下に隠し、老若の別なく女と見れば片っ端から強姦する……ありとあら

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com